

## 『石牟礼文学』 第39回

石牟礼道子<sup>いしむれ</sup>が2月に亡くなった。水俣病患者を取り上げた大著『苦海浄土』<sup>くかい</sup>は、池澤夏樹によって、日本戦後文学の傑作として個人編集『世界文学全集』（河出書房新社、2011年）に日本の作品で唯一収録された。

『苦海浄土』は、東日本大震災のあと、被災地の人々に読まれたのだそうだ。徳水博志のいう「関係性の喪失」「不条理の感情」を埋める……いや、ただただそれらがどういう体験なのか、そこに希望があるのか、やむにやまねず手が伸ばされたということだろう。

日々やつてくる出来事（event）を被って私たちは体験をもつ。それは、様々な人間の営みを通して個人の経験へ、そして国民的経験へと編まれていく。

池澤は、同じく個人編集の『日本文学全集』にも石牟礼を推して『樁の海の記』を収録した。解説で池澤は、近代への批判という読み方を修正し、石牟礼を『苦海浄土』の作者という身分から救い出そうとする（文



献①499頁）。おもかさま・神経殿と呼ばれる障害のある祖母が「漂浪く」（18頁）時、4歳のみっちゃんが連れ戻しに行くような日常生活が描かれていく。みっちゃん「最初の詩想のようなもの」（243頁）を持つ——「この世の無常ぞ織りあがる」（245頁）。

池澤は渡辺京二を引用しつつ、『苦海浄土』はすでに「分裂と崩壊が彼女の幼児に体験したそれとまったく相似だったから」「忠実な聞き書などによらずとも」（渡辺）一人称の文体に載せて書けるとした（512頁）。しかし『樁の海の記』と聞き書きの方法については、あえて主観と客観、自分（インタビュアー）と相手、作文方法と生き方を分けた上で、多様なあり方と指導手順を探究した文献②に学んで深める必要がある。（研究部・加藤聡一）

### 参考文献

- ①池澤夏樹Ⅱ個人編集『日本文学全集 24 石牟礼道子』河出書房新社、2015年。
- ②中井浩一・古宇田孝子編著『聞き書き』の力 表現指導の理論と実践 大修館書店、2016年。